遺族の友

発行所
一般財団法人滋賀県遺族会
滋賀県大津市におの浜4丁目2－34
滋賀県遺族会館
電話　(077)522-7227
FAX　(077)522-7233
発行責任者
滋賀県遺族会長
岸田　孝一

滋賀県戦没者遺族大会

遺族会に明るい光

青年部が大会運営に尽力

11月15日、滋賀県立米原文化産業交流会館で、平成27年度滋賀県戦没者遺族大会が約900人の参加を得て開催された。今回は式典進行を今年度発足した青年部が務め、大会運営に新風を吹き込み、これからの滋賀県遺族会に明るい光が感じられる記念すべき大会となった。

国歌斉唱、黙祷に始まり、滋賀県遺族会長あいさつでは、岸田孝一会長は「この一年間を振り返ると、二度と私たちのような悲しい思いをさせないためにと青年部組織が新たに誕生し、遺族会活動の大きな力となる期待が寄せられることとなった。同時に、戦没者の遺児や兄弟姉妹として、恒久平和の実現のため、まだまだやらなければならないことも多く、私たちだからこそ声を大きく出して訴えなければならない。さらなる遺族会活動に積極参加協力をお願いする」と、力強く述べた。

続いて、長年にわたり戦没者遺族等に対する援護事業に携わり、その功績が特に顕著な方を表彰。滋賀県知事表彰8人、滋賀県遺族会長表彰25人が受賞した。また、彦根市遺族会へは、滋賀県護國神社の地元として神社の護持運営に尽力するとともに長年の真摯な活動が認められ、滋賀県遺族会長から感謝状が授与された。

次に、三日月大造滋賀県知事、西村久子滋賀県議会議長はじめ来賓の方々から祝辞をいただき、次世代を担う児童の次世代戦跡訪問研修体験発表へと移った。知覧を訪問した米原市立坂田小学校の福原貫志さん、沖縄を訪問した彦根市立東中学校の疋田まこ都さんと藤本伊吹さんの3人は「戦争の悲惨さ、家族や友を思いつつも世のため国のためと尊い命を捧げた人たちの悲しさを思いつつ、二度と愚かな戦争を繰り返さないため、私たちが力を尽くさねばならない」と、それぞれ訴え、参加者の心を大きく動かした。

最後に、西川満長浜市遺族会長が大会宣言・大会決議を朗読提案し、満場の拍手で承認され第一部を終了した。

滋賀県遺族会長表彰を受賞する堀江成雄さん（米原市）

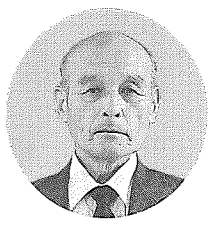
第二部は、水落敏栄日本遺族会長の「遺族会の課題と今後の運動」と題した講演で始まった。

水落会長は、自身の戦争遺児としてのご苦労のあった体験を踏まえ、遺族会の今後のあり方について熱く語られた。特に、次世代育成については、滋賀県遺族会の取り組みを高く評価しつつも、平均年齢が75歳を超えた現在の遺族会において、日本人の平均寿命が80歳越えからすれば、まだまだ私たちにやるべきことが残されている。次世代を力強く育てるとともに、遺児の皆さんが今から10年間はなお一層頑張らなければならないと強調された。

大会締めくくりの近江高等学校吹奏楽部演奏は、指揮をしていただいた顧問の樋口心先生の軽妙なお話しもさることながら、県下最大の部員80人擁するクラブの、演奏の華麗さ、力強さに参加者全員が引き込まれ、一日の疲れも吹っ飛ぶ楽しいひとときとなった。こうして終戦70年の記念すべき大会は成功裏にすべて終了した。

（総務企画委員会
委員長
三田　俊雄）

新年のご挨拶


滋賀県遺族会長
岸田　孝一

新年おめでとうございます。

平素は、遺族会の事業活動にご理解とご参加をいただいておりますことに心より感謝申し上げます。

平成28年、西暦2016年を、健康で、また、ご家族お揃いで新しい年のスタートを切られたこととお慶び申し上げます。

昨年一年を振り返ってみますと、戦争を実際に体験された方々の高齢化に伴い、後世に伝え残すべき大事な事柄を今のうちに聞いておかなければならないと、マスコミ報道はじめ国内の皆さんが目指し、終戦70周年の大きな節目の年としての話題が多くありました。

今年は、次の80周年に向けてのスタートの年です。物事の始まりは、一が大切だと思います。スタートダッシュにふさわしい活発な遺族会活動を目指そうではありませんか。

皆さんお元気でそれぞれの立場で、地元遺族会はもとより滋賀県遺族会の諸事業へのご参加を心よりお待ち申し上げ、本年も会員皆様にとりまして良き年となりますことをお祈り致しまして、年の初めのご挨拶とさせていただきます。

女性研修会

青年部活動に期待して

10月7日、平成27年度滋賀県遺族会女性研修会が近江八幡市の滋賀県立男女共同参画センターにて開催された。

当日は、秋晴れのもと県下各地から200人（女性会員、男性役員、青年部員）が参加。今年度は終戦70年目の年で青年部も結成され、大変良い機会でもあり今後青年部への組織の継承や、一層の充実を図ることを目的として開催した。

岸田孝一滋賀県遺族会長の挨拶に続いて、的場恵美子副会長（女性部会長）の挨拶があり、「遺族会員は平均年齢が75歳を超えてしまい、今まで築き上げて来られた遺族会を私たちの世代で終わらせないよう守り、活動を続けるため、組織基盤の維持強化を図る必要があり、戦没者の孫・ひ孫へと、どのように継承していくかという大きな課題がある。英霊顕彰をはじめ、戦没者の福祉の増進や私たちのような遺児をつくらないよう、また、戦争を風化させることのないよう戦争の悲惨さと平和の尊さを次の世代の人たちに伝え、青年部が大きく育ってほしい」と述べた。

続いて、水落敏栄日本遺族会長・参議院議員を講師にお迎えし、「女性部と青年部活動のあり方について」と題して講演をいただいた。講演では、遺族会の歴史、そして「遺族会構成の年令が高くなっている。その中で青年部の必要性が出てきて、次世代の活動育成が最重要課題となっている。しかし、次世代を担う孫たちが社会人として必要なポストに就いている年令でもあり、遺族会活動に参加することが難しいのも課題であるが、出来るだけ事業に参加してもらうことが大切で、今後10年間は今の遺族会を担っている者が頑張って行くことも大切なことである」と話された。

挨拶する岸田孝一滋賀県遺族会長

午後からは、前年度と同様に4分科会に分かれ、講演内容と同じテーマで話し合いをした。分科会終了後、近江八幡警察署山口隆交通課長他で交通安全についてご指導をいただいた。引き続き、交通安全協会竜王支部の皆さんによる二人羽織の熱演に会場は大いに盛り上がった。

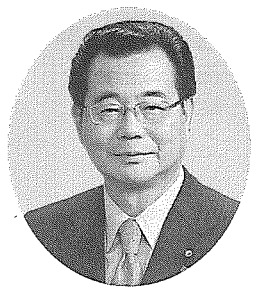
その後、4分科会の代表がまとめを発表。特に、初めて参加された青年部の女性の方からも活発な意見が出て、心強く感じると共に、しっかり根を張って大きく育ってほしいと願っている。

全体のまとめとして川嶋之生副会長から女性部の活躍を称賛していただき、「今後ますます健康で活躍をお願いします」と結ばれた。

角野彰夫事務局長より滋賀県遺族会事業等の報告の後、靖國神社の歌を斉唱。福永政子女性部副部会長の閉会のことばで研修会は無事終了した。

（女性委員会
委員長
重田　美津子）

遺族の声　国政に届けよう



日本遺族会　会長
参議院議員
水落　敏栄

ご遺族の皆様にはお元気で新しい年をお迎えのことと拝察いたします。

天皇皇后両陛下におかれては、昨年のペリリュー島への訪問に続いて、本年1月、海外戦没者数最多の52万人が戦没されたフィリピンへの訪問を発表されました。両陛下が、常に戦没者とその遺族に心を寄せていただいていることに、遺族を代表し心より感謝申し上げます。

私事ですが、全国のご遺族皆様のご支援を賜り、国会にお送りいただき、早や11年半となりました。この間、戦没者の妻の特別給付金、特別弔慰金の継続、増額、ご遺骨の帰還促進のための議員立法等、ご遺族皆様の処遇改善等に加え、文部科学大臣政務官、二度の参議院文教科学委員長を拝命し、教育・文化の振興等にも携わらせていただきました。これも偏に、ご遺族皆様のご支援の賜物と厚くお礼申しあげます。

昨年2月には、本年の参議院選挙に、遺族会唯一の候補とお決めいただきました。浅学非才な私でありますが、組織でご決定いただきましたことに衷心より感謝申し上げます。また昨年6月には日本遺族会会長を仰せつかりました。戦後70年の節目の年に、社会的にも大変責任の重い大役をお引き受けし、身の引き締まる気持ちで一杯です。

遺族会の今後最大の課題は、後継者の育成です。日本遺族会では、昨年3月に青年部結成に向けた初の全国研修会を開催し、11月には女性部と合同の研修会を開催、それに呼応するように各都道府県では、青年部の研修会が開催されました。しかし、青年部の結成には各都道府県で温度差があることは否めません。

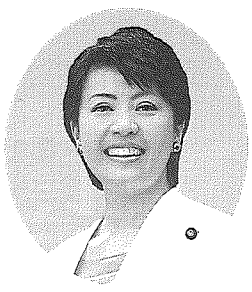
平和で豊かな時代に育った世代が、飢えと貧困がはびこり、死と隣り合わせの時代に思いを馳せるのはとても難しいことでしょう。平和学習の一環で、学校に戦争体験を話しに訪れた遺児の方が、「日本はどこの国と戦争をしたのですか?」「赤紙はなぜ拒否できないのですか?」といった子どもたちの質問に面食らったとお話しされていました。それほどに意識が違うのです。しかし、各地の青年部研修会の参加者の真剣な眼差しには希望を感じています。

遺族会の活動とは、戦争の悲惨さ、平和の尊さを語り継ぎ、恒久平和な社会の実現を目指すものです。平和とは、人間の命の尊厳を守ることであり、普遍的テーマであります。命を尊ぶ社会となれば、おのずと戦争、紛争は勿論、いじめなどもなくなると思います。だからこそ、私たちの活動には大義があります。

私は、戦後一貫して世界の恒久平和を希求し活動してきたこの尊い組織を次世代へつなげるために、青年部の組織化に力を尽くして参ります。そして、私たちの様な遺族を二度とつくらないために、遺族の声を国政に届け続け、平和の灯りを守り続ける覚悟でございますので、引き続きご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

結びに、ご遺族皆様のご健康と、平成28年がより良い年であります事を心から祈念し、ご挨拶といたします。

英霊顕彰を国民運動に



滋賀県遺族会　参与
参議院議員
有村　治子

謹んで新春のお慶びを申し上げます。ふるさと・滋賀の遺族会の皆様には、いつも温かく迎えていただき、心より感謝申し上げます。

安倍内閣において六つの分野を担当する国務大臣を拝命し、昨年十月、その役を完遂することができました。十三か月間の在任期間中、靖國神社の春と秋の例大祭、また戦後七十年の節目の八月十五日には着任前と変わることなく、心して参拝させていただきました。

その際には、滋賀をはじめ全国の遺族会の多くの皆様から「参拝してくれてありがとう。」と励ましのお言葉を賜り、本当に勇気づけられました。

各方面から様々な声が上がり、マスコミからも多くの質問を受けましたが、「塗炭の苦しみを味わってこられたご遺族の皆さんのその後の歩みに、想いを致す政治家としての信念であり、国難の時に、国家の命によって戦地に赴かれた方々に、後世の国民が哀悼と感謝の誠を捧げることは当然のことである」と、迷いなく発言して参りました。

この信念を揺るぎなく主張し続けられるのは、遺族会の皆様と想いや時間を共有し、戦地で散華されたお父様へのお気持ちや、ご遺族の重ねてこられたご労苦を直にお聞かせいただいてきたからこそであり、志を同じくする同志として、ご遺族の輪に入れていただける有り難さを改めて胸に刻みます。

これからも、遺族会の皆様の精神、価値観を常に心に携えて、務めを果たして参ります。どうぞ引き続き、ご指導を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

昨年、滋賀県遺族会に青年部が発足されたことは誠に心強く、ご英霊の想い、ご遺族の声を次世代に受け継ぎ、英霊顕彰をご遺族だけの課題とせず、幅広い国民運動に繋げていけるよう、若い皆様と共に私も力を尽くす決意であります。

この一年が皆様にとりましてお健やかで充実した日々となりますことを祈り念じまして、新年のご挨拶といたします。またお仲間に入れていただける日を楽しみにしております。

自由民主党滋賀県国会議員・県議会議員とのつどい

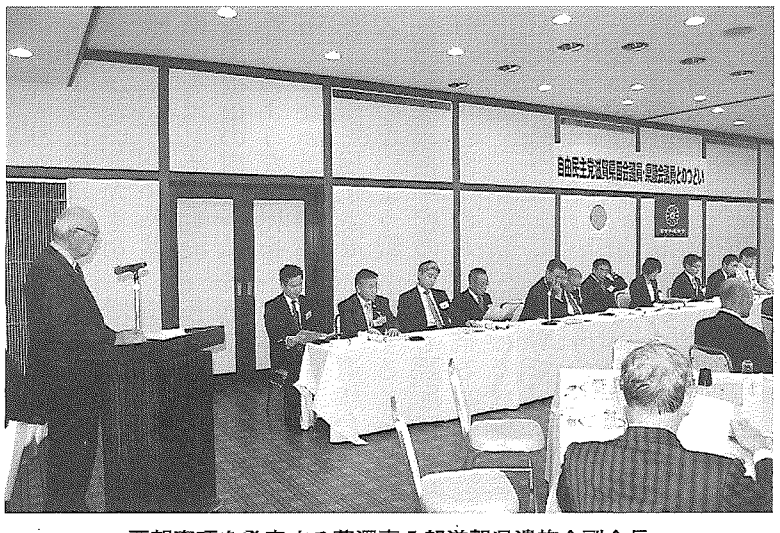
六項目の要望を提出

平成27年12月5日アヤハレークサイドホテルに於いて滋賀県遺族会役員、各郡市遺族会長等100余人参加のもと、「自由民主党滋賀県国会議員・県議会議員とのつどい」が開催された。

澤本長俊青年委員会副委員長の司会で進行され、的場恵美子滋賀県遺族会副会長の開会のことばで始まった。

国歌斉唱、黙祷と続き、岸田孝一滋賀県遺族会長が「今まで30数回の懇談会があり、そのたびに国会議員、県議会議員の皆様にいろいろ要望をさせていただき、検討をしていただいていることにお礼を申し上げます。今回も、国への要望と滋賀県への要望事項合わせて6項目を掲げましたので、応えていただきますようお願いします」と挨拶し、上野賢一郎自由民主党滋賀県支部連合会長と吉田清一自由民主党滋賀県議会議員団代表の挨拶があり、藤澤喜八郎滋賀県遺族会副会長より要望書が読み上げられた。

その後、各議員より「戦後70年の節目の年に、この様に青年部の人が活躍している。私たちは正しい戦争の事実を知り、経験を生かして将来に繋げたい。今回の要望事項を最大限努力します」と述べられた。



要望事項を発表する藤澤喜八郎滋賀県遺族会副会長

要望事項

☆国に対する要望

①総理、閣僚等の靖國神社参拝の推進と、国立の戦没者追悼施設新設構想の断固阻止について

②戦没者の未帰還遺骨の収集と、遺品の売買を禁止する法律を制定し、戦没者の貴重な遺品を早期に遺族に返還することについて

☆県に対する要望

①知事をはじめとして、県議会議員や市町長・市町議会議員の護國神社参拝について

②滋賀県主催による滋賀県戦没者追悼式の、真に全県民による追悼式の実現について

③全国戦没者追悼式に、多くの青年部が参加しやすい基準の制定について

④先に、県へ寄贈された戦闘機を何らかの形での早期展示・活用について

＊

「議員とのつどい」に出席された皆さん（敬称略・順不同）

衆議院議員　大岡　敏孝
衆議院議員　上野賢一郎
衆議院議員　武村　展英
参議院議員　二之湯武史
滋賀県議会議員　佐野　高典
山本　進一
佐藤　健司
奥村　芳正
岩佐　弘明
竹村　健
吉田　清一
家森　茂樹
富田　博明
高木　健三
小寺　裕雄
加藤　誠一
村島　茂男
（議長）西村　久子
川島　隆二
（広報）林　恵美子

未開の戦争遺跡多数

西部ニューギニア方面戦跡慰霊巡拝

平成27年度滋賀県遺族会の西部ニューギニア方面戦跡慰霊巡拝は、多くの人たちが行き交う賑やかな関西空港出発ロビーで、的場恵美子団長（滋賀県遺族会副会長）の結団の挨拶で始まりました。

この度の西部ニューギニア方面戦跡慰霊巡拝は、平成20年以来の訪問で初めての参加者も多く、期待と不安の混ざり合う気持ちでいっぱいの14人と添乗員の出発でした。

関空を出発して約21時間、19日の朝にニューギニア島西端ソロンに到着。ソロンは日本軍拠点死守命令で多くの戦没者が眠る地ですが、戦後70年が過ぎ、慰霊碑は海沿いのソロン岬と小高い山のバナナ台の2ヵ所だけでした。この地や西方の島々、近海で亡くなられた方々のご冥福を祈り、それぞれの慰霊碑で慰霊祭を行いました。

20日は、ソロンから東へ約300kmのマノクワリへ移動しました。マノクワリは大正時代に日本人がバナナやパイナップル等南国の果物を育てるために入植されていた所です。先の大戦時には日本軍の大拠点で、滋賀県の方々が多く上陸された地であり、戦没者も沢山おられます。敗戦が濃くなった時期には、西のソロンや南のランシキ・ヤカチ方面へ地獄の逃避行の始まった地点でもありました。

この慰霊巡拝団のもう一つの目的である国際友好親善は、大きな小学校を訪問しました。超元気な子どもたちが地元のダンスで歓迎してくれ、団員も仲間に入って踊りました。約200人の子ども達はキラキラと目を輝かせ、元気に握手やハイタッチ、ハグで応えてくれました。持参したお土産には教室が割れんばかりの拍手をいただきました。

マノクワリには沢山の施設跡・戦跡・病院跡・慰霊碑があり、激戦地の海岸2ヵ所と第125兵站病院跡で慰霊祭を行い、英霊のご冥福をお祈りしました。戦前に入植された方々の日本人墓地は、樹木のすき間からマノクワリ港や市街が一望できるジャングルの高台にあり、バスで狭い道を上りお参りしました。

マノクワリからビアク島へは貸切船で渡り、途中で洋上慰霊祭を行う予定でありましたが、今は雨季で海が荒れ無理なので、2機の小型機でビアク島入りしました。ビアク島も激戦地で、沢山の英霊が眠っておられます。戦争遺跡も数多く残っており、東西の洞窟や日本軍の飛行場跡、軍港跡、病院跡、見晴らし台を巡りお参りしました。日本軍の野砲2門が錆びずに転がっていました。

西部ニューギニア方面とその近海地域の戦没者を祀る「第2次世界大戦碑」で合同慰霊祭を行いました。英霊の悔し涙か、この度も雨に見舞われた慰霊祭となりました。

平和祈念式典は、的場団長の式辞、参加者の追悼の言葉、木下清彦英霊顕彰委員会副委員長の「平和宣言」で平和を誓い、追悼法要は貴多成道僧侶の読経で焼香し、全員で般若心経を唱え英霊のご冥福と世界平和をお祈りしました。

（英霊顕彰委員会　委員長　伴　忠信）

西部ニューギニア方面戦跡慰霊巡拝に参加した皆さん

青年部発足記念

“なんじゃもんじゃ”の木記念植樹

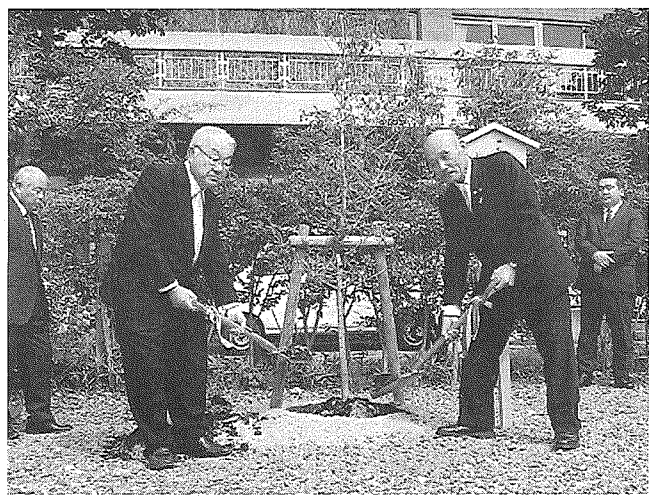
戦後70年が経過した平成27年、遺族会を引き継ぐ後継者として青年部が4月に結成された。

これを記念として、護國神社の秋季例大祭が挙行された10月5日、軍馬・軍犬・軍鳩の慰霊碑横で記念植樹が行われた。

紅白の幕の内に、安土の沙沙貴神社から分けていただいた〝なんじゃもんじゃ〟の木が仮植えされ、式典を挙行。岸田孝一滋賀県遺族会長の挨拶の後、青年委員会の辻正人委員長、澤本長俊副委員長、各郡市青年部長、青年部参加者等全員が根元に土をかぶせ、すくすくと大木に育つことを願いながら式を終えた。

〝なんじゃもんじゃ〟の木（一葉たご＝ひとつばたご）とは、木犀科（＝もくせいか）。開花時期は4月下旬から5月上旬。花はプロペラ型の白い花。自生しているものは、天然記念物にも指定されている。

（滋賀県遺族会　副会長　川嶋　之生）


記念植樹する滋賀県遺族会前会長松井尚之氏（左側）と岸田会長（右側）

日本遺族会「青年部」組織化に向けて

女性部との合同研修会に参加して

青年委員会　委員長　辻　正人

11月3日、東京都千代田区のアルカディア市ヶ谷での標記研修会に参加しました。滋賀県遺族会からは、的場恵美子副会長（女性部会長）、角野彰夫事務局長、青年委員会から澤本長俊副委員長と私の計4人が参加。参加者数118人。各都道府県の女性部長と青年部（結成済み、結成予定）の方々との分科会・意見交換等で、遺族会活動について改めて勉強させていただきました。

特に、遺族会の後継者問題（青年部組織化）の現状は、「働き盛りの世代に活動を継承させることの遠慮と、平和の中に生まれ育った世代に活動意義を伝えることのむずかしさ」から、「日本遺族会としても思い切った策が示せない」。そんな印象を受けました。

持論ですが、「働き盛りであろうが遺族である限り、史実を把握し、今日の平和を点ではなく、歴史上の線として理解すれば、英霊顕彰は至極当然のことだと気づき、感謝を行動に移す意味で遺族会活動に関わることが出来るではないか」と思います。「出来ることを出来る時に」という条件は付きますが。

最後に、次世代を担う遺族の皆様、かつての日本人は自分の利益に結びつかなくとも、周囲の人や社会、国家の利益を優先する品性を持ち合わせていたと言われています。「今日の平和は、そのような先人の尊い犠牲の上に成り立っている事実を後世に伝える。但し、出来ることを出来る人が、出来る時に」といった姿勢で、遺族会活動にご協力していただくことをお願いし、研修の報告に代えさせていただきます。今後ともご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

『滋賀県英霊顕彰館』建設へ

大東亜戦争が終結して70年が過ぎ、靖國神社と護國神社を取り巻く環境は益々厳しさを増しています。

今日まで神社を支えていた遺族や戦友の高齢化により、今後参拝者の減少など、神社の前途に懸念の兆しが窺えます。

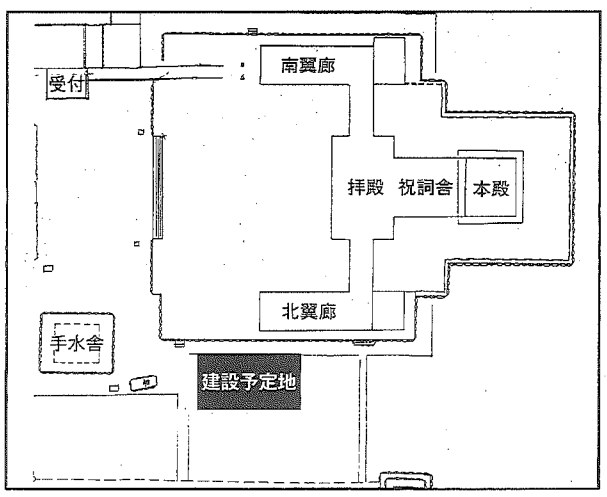
このような事態を憂慮し、滋賀県護國神社では、終戦70年と神社創立140周年（平成28年）の記念事業の一環として、英霊の存在を目に見える形で後世に伝えて行こうと考え、在りし日の英霊の写真を掲揚・展示する施設「滋賀県英霊顕彰館」の建設を進めています。戦後世代の英霊に対する尊崇の意識が希薄化しつつある中、「滋賀県英霊顕彰館」がこれら世代の意識改革のきっかけになることを期待します。

英霊に感謝と報恩の誠を捧げることの重要さは言うまでもなく、英霊の遺徳を子々孫々にまで変わることなく顕彰し、伝えて行くことは、平和な時代に生きる私たちの使命ではないでしょうか。

以上は筆者が、12月上旬、滋賀県護國神社にて、山本大司禰宜にお聞きした要点です。

なお、お写真の掲揚展示についての詳細は、滋賀県護國神社社務所（電話0749－22－0822）にお問い合わせください。

（広報　原　幸男）



建設予定地

墨ぬり教科書

守山市遺族会 会長
山川芳志郎

伝統的習俗が消えた教科書

昭和20年8月15日、敗戦を迎え、また、連合軍の占領という事態に直面して、教育はまず戦時体制の解除、平時の常態に戻すことから始まりました。

文部省から矢継ぎ早に以下のような指令、通達が出されたのです。

8月16日
学徒動員解除
8月24日
軍事教育、戦時体練、学校防空関係諸訓練の廃止
8月28日
平常授業の復帰指令
9月15日
「新日本建設の教育方針」発表
9月20日
教科書の取扱方通達
9月26日
疎開児童の復帰指令
10月3日
銃剣道・教練の禁止
11月6日
武道禁止

◇

学校教育に大きな影響を及ぼす教科書についてのみまとめます。

8月24日に戦時教育の廃止を指令し、8月28日には9月からの授業の再開を指示しています。ところが古い教科書は、軍国主義、国家主義に彩られていますし、まだ新しい教科書はありません。ここに登場するのが急場しのぎの墨ぬり教科書です。

戦時中の教科書をそのまま使って、その中で国防や軍備を強調したもの、戦意の高揚に関するものや国際平和を妨げるものの部分に墨をぬって間に合わせたのです。この墨ぬり教科書は、国語に限らず算数・理科・図画・音楽などあらゆる教科書に及んでいます。

具体的には、どのような内容に墨がぬられたのか、滋賀大学図書館に通って調べました。また、当時教壇に立っておられた先生3人にお出会いして軍国主義、国家主義から民主主義に180度変わった教育思想、教育活動などで戸惑いがなかったか当時の学校の様子を聞くことができました。

(1) 富田　和　先生（当時）
勝部小学校　勤務
(2) 遠藤　伊久夫　先生（当時）
祇王小学校　勤務
(3) 小澤　富美子　先生（当時）
玉緒小学校　勤務

＊

【資料1】は「ヨミカタ　二」に出てくる「うさぎとかめ」の話です。ウサギは途中でひるねをし、かめに追い抜かされる有名な話です。最後に勝ったのはかめで、「バンザイ」とさけびます。この「バンザイ」がいけないということで墨をぬった上で「ウサギサン」というかけ声に変わっています。もちろん「日の丸」はダメです。

この他にも「日本昔ばなし」に出てくる復讐教材はダメ。例えば「サルトカニ」、日の丸を掲げての「モモタロウ」などがそれです。雪合戦も墨をぬりました。

＊

【資料2】は「カズノホン　四」に出てくる軍艦の大砲がいくつあるかを問う問題です。軍艦がダメで全部墨ぬりです。

＊

【資料3】は「初等科算数　四」に出てくる体積を求める問題です。「縦2米、横2米、高さ2米ノ防空壕ガアリマス。コノ壕ニハ空気ガ何立方米ハイッテイルデセウ」で、防空壕がダメで墨ぬり。

＊

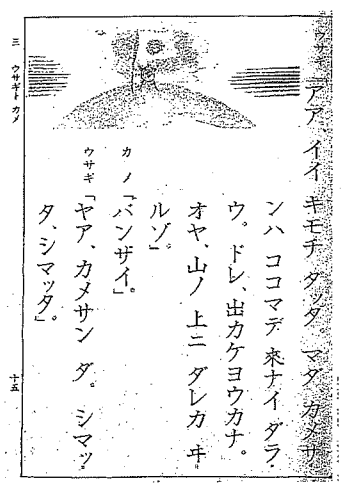
【資料4】は「初等科算数　六」に出てくる対称形の説明文です。お宮さんがダメということで適当な教材を補充せよと言っています。

＊

【資料5】は「よみかた　四」に出てくる「海軍のにいさん」の文章です。これは全文墨ぬりです。

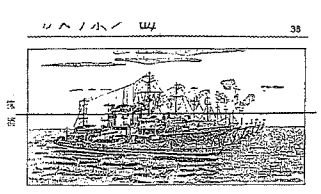
資料には載せませんでしたが「音楽」を拾ってみます。『村の鎮守の神

【資料1】「ヨミカタ　二」

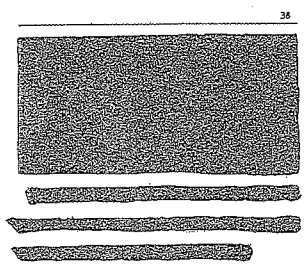


「うさぎとかめ」の話で、かめが叫んだ「バンザイ」が駄目で「ウサギサン」に変わる

【資料2】「カズノホン　四」



軍艦の大砲の数を問う問題で、軍艦が駄目で全部墨ぬりとなる。



全国護國神社の自転車参拝を終えて

滋賀県遺族会　相談役　國松善次

靖國神社を参拝した國松相談役

毎年、自転車で琵琶湖一周をしている私は、後期高齢者になった記念にと、全国護國神社の自転車参拝を思いついた。とは言え、全国となると実際は無理と考え、取りあえず近隣をと、彦根をスタート。先ず京都の霊山護國神社に向ったのが平成24年9月13日だった。

以来、日程が取れると、お天気が良ければ自転車に乗って近畿各府県に順次足を延ばし、護國神社参拝をした。近畿が済むと、次は北陸、更に国道一号線を三重から太平洋岸沿いにサイクリング。箱根の峠を越えて東海道の起点、日本橋に到着。靖國神社に初めて自転車で参拝。この後も毎月必ず日程をつくり、自転車を担いで列車に乗り、続きを西へ東へと参拝の旅を続けた。

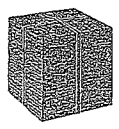
さすがに九州や沖縄、北海道は自転車で渡れず、新幹線や飛行機を使ってのサイクリングとなった。そして3年越しで終戦70年の平成27年11月18日、旭川にある北海道護國神社に到着。全国都道府県の参拝を一応完了。早速、滋賀県護國神社に報告参拝した。

ところで、今回の全国護國神社自転車参拝は、英霊に感謝と平和祈願が目的だったが、いろいろと学ばせられた。先ず、行く先で護國神社を尋ねたが、残念ながらほとんどの人は知らないと言い、観光案内所でも知らなかったり、地図になかったりすることがあり、実に情けない思いをした。きっと英霊は悔しく、嘆き悲しんでおられるのではと思った。これは戦後70年という時間が忘れさせたのではなく、明らかに戦後生まれの人たちに伝えなかった、教えて来なかったのだ。また、近年靖國神社は参拝客が増え、それも若者が多く、外国人も目立つのに反し、護國神社の平日参拝客は稀で、それも遺族や英霊関係者がほとんどだというのが実態である。勿論、各神社では、行事や広報に様々な工夫や努力がなされていたが、成功事例はあまり見られなかった。

ともあれ、護國神社は氏子のいない神社だけに、その意味を知った人が年々減少し、あと10年、20年もすれば間違いなくいなくなる日が来るとなれば、その維持管理が危惧される。

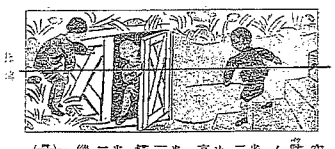
従って、遺族会や神社関係者はもとより、英霊にこたえる会など日本の将来を憂える心ある日本人が現在の教育や憲法の問題も含めて真剣に考え、行動すべき時にある。これからの10年がその勝負を決めるのは確かだろう。

【資料3】「初等科算数　四」



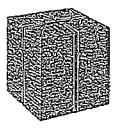
(5)　一稜　十二糎　ノ立方體　ノ箱ヲ，圖ノヤウニシバルニハ，ヒモノ長サガドレクラヰアレバヨイデセウ。

(6)　内法デ，縦　三十糎，横　五十糎，深サ二十五糎　アル米ビツニ，深サ十糎ダケ米ガハイツテヰマス。米ハ何リツトルアルデセウ。



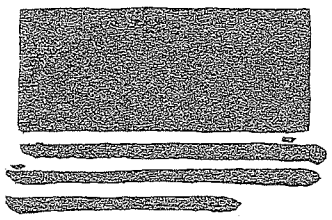
~~(7)　縦二米，横二米，高サ二米ノ防空壕ガアリマス。コノ壕ニハ空氣ガ何立方米ハイツテヰルデセウ。~~

体積を求める問題で、防空壕が駄目で、墨ぬりとなる。



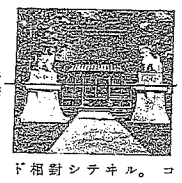
(5)　一稜　十二糎　ノ立方體　ノ箱ヲ，圖ノヤウニシバルニハ，ヒモノ長サガドレクラヰアレバヨイデセウ。

(6)　内法デ，縦　三十糎，横　五十糎，深サ二十五糎　アル米ビツニ，深サ十糎ダケ米ガハイツテヰマス。米ハ何リツトルアルデセウ。



【資料4】「初等科算数　六」

〔對稱形〕



~~左ノ圖ノヤウニ~~ハ，左右ガ同ジ形デアル。コノヤウナ形ヲ　對稱形トイフ。二ツノコマ犬ハ，チヤウド相對シテヰル。コノトキ，コマ犬ハ對稱ノ位置ニアルトイフ。

(1)　人ノ顔ハ　對稱形　デアルカ。
　兩手ヲ對稱ノ位置ニ並ベテミヨ。
　片方ノ手ハ　對稱形　デアルカ。

(2)　私タチノ机ヤ腰掛ハ，ドチラカラ見ルト　對稱形　ニ見エルカ，調ベテミヨウ。

(3)　身ノマハリノ物ノ中カラ，對稱形ヲ見ツケヨ。

対称形の説明文で、お宮さんが駄目で、適当な教材を補充せよと言っている。

〔對稱形〕

ハ，左右ガ同ジ形デアル。コノヤウナ形ヲ　對稱形トイフ。二ツノコマ犬ハ，チヤウド相對シテヰル。コノトキ，コマ犬ハ對稱ノ位置ニアルトイフ。

(1)　人ノ顔ハ　對稱形　デアルカ。
　兩手ヲ對稱ノ位置ニ並ベテミヨ。
　片方ノ手ハ　對稱形　デアルカ。

(2)　私タチノ机ヤ腰掛ハ，ドチラカラ見ルト　對稱形　ニ見エルカ，調ベテミヨウ。

(3)　身ノマハリノ物ノ中カラ，對稱形ヲ見ツケヨ。

【資料5】「よみかた　四」

三　海軍のにいさん　よみかた四

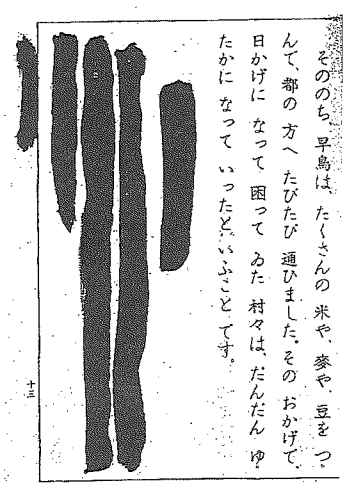
そののち、早島は、たくさんの米や、麥や、豆をつんで、都の方へたびたび通ひました。そのおかげで、日かげになって困ってゐた村々は、だんだんゆたかになっていったといふことです。

三　海軍のにいさん

ぼくが本を讀んでゐると、くつの音がして、だれかうちへはいって来ました。出て見ると、海軍のにいさんでした。

十三

「海軍のにいさん」の文章で、全文墨ぬり。



そののち、早島は、たくさんの米や、麥や、豆をつんで、都の方へたびたび通ひました。そのおかげで、日かげになって困ってゐた村々は、だんだんゆたかになっていったといふことです。

十三

様の、今日はめでたいお祭り日…』で始まる有名な「村祭」の歌です。これは、「初等科国語　二」でも出てきます。神様の祭ということで全文墨ぬりです。この他、「キミガヨ」「ヒノマル」「モモタロウ」「兵タイゴッコ」「ヒコウキ」を始め「初等科音楽」からは「少年産業戦士」「日本海海戦」「落下傘部隊」「水師兵の会見」「日本刀」の歌が姿を消しました。

▼まとめ▲

天皇を称えることばだった「バンザイ」はダメ。神道に由来するお祭りもダメ。正月に神棚を飾る話、坑道に入る前に鉱員が神棚に向かって無事を祈る場面も墨をぬりました。習俗は宗教と密接な関係をもっています。日本の場合、多くの人々が神社の氏子になっていましたから日本の習俗と神道は切り離すことはできません。つまり、神道が出てくる場面をすべて塗りつぶしたことにより教科書から伝統的な習俗がほとんど姿を消すことになったのです。

当時教壇に立ちご指導いただいた先生の中から、富田和先生と小澤富美子先生のご意見を載せさせていただきます。

(1)　墨ぬりは誰がしたか。

T…子どもに自分の教科書をぬらせた。指示は文書で来たと思う。

O…子どもにさせた。指示書に合わせてまず国語だけ。他の教科はしていない。机についていた墨をすって子どもにさせた。

(2)　墨ぬり教科書を使って授業をしましたか。子どもの反応は。

T…墨ぬり教科書を使っての授業はしていない。従って子どもの反応はない。

O…墨ぬり教科書を使って授業をした記憶はない。使ってないから反応はない。

(3)　戦前は軍国主義、国家主義でピシッと授業をしたと思う。9月1日から新しく民主主義のかけ声のもとでスタートしたと思うが、学校の雰囲気はどうだったか。

T…コアカリキュラムの導入で学校の雰囲気は次第にその方向になって行ったと思う。学校がのんびりした雰囲気で生温いと思った。私は以前、ヨミ、カキ、サンスウに力を入れていたので、こんな教育方法で子どもに力がつくとは思えなかった。学校に遊びの様な模擬生活を導入し、そこから学習させることは私の力量では無理だと思った。

O…学校の雰囲気はのんびりしていた。まっすぐ並ばせることはない。「前へならえ」はできなかった。以前のように「集合」の号令で集合させるのでなく「みんな集まっといで」だった。「1時間目国語、2時間目算数」ということじゃなかった。学芸会があった。これもコアカリキュラムの一つ。

(4)　その他

T…戦中は運動会がなかったが、運動会ができた。オルガンを運動場に持ち出し、「どんぐりころころ」の遊戯をさせたのを覚えている。

女の先生2人で宿直をした。授業らしい授業はできないし、私自身イライラした毎日だった。そこで帰りの会で毎日、日本昔ばなしのような今でいう読み聞かせをした。

〈付記〉

私はこの先生が担任だったので、毎日話してくださる話を楽しみにしていました。今でも同窓会をすると、数名の旧友が「あの先生、まだ存命か。待ち遠しかった、楽しかったなあ」と、本のない時代、何もない時代に生きた私たちに今でも心に残る話、読書の喜びを教えてくださった先生が懐かしいし、感謝しています。

O…昭和22年になったらガリ版刷りの教科書が登場した。これで授業をしたがレベルが低い。教科書という感じではなかった。先生が解放された感じ。どうしてよいかわからない状態。校長先生もあまりやかましく言われなかった。解放されたというのは何も命令されることがなくなった。まず新聞を読む、本を読むことを勧められた。

戦没者遺族相談員が改選されました

平成27年10月1日から下記の18名の方々が戦没者遺族相談員として委託されました。戦没者遺族の援護等に関してお気軽にご相談下さい。

氏名	性別	電話番号	分担地区
服部　清和	男	077-546-1294	大津市南部
青木　貞子	女	077-572-1726	大津市北部
林　恵美子	女	0749-25-0738	彦根市
川崎　和一	男	0749-43-4333	彦根市
隼瀬丈太郎	男	0749-79-0696	長浜市（旧伊香郡除く）
丹治　義和	男	0749-89-1016	長浜市（旧伊香郡）
杉浦　俊雄	男	0748-32-6603	近江八幡市、竜王町
瀬川　勲	男	0748-52-1085	東近江市（旧蒲生町）、日野町
藤田　武男	男	0748-23-4799	東近江市（旧蒲生町除く）
木村　正昭	男	077-562-3594	草津市
松井　尚之	男	077-552-0645	栗東市
杉江　周作	男	077-585-1381	守山市
白井　嘉嗣	男	077-589-3669	野洲市
中村　武治	男	0748-72-0190	湖南市
西田　貞夫	男	0748-88-4791	甲賀市
瀬戸川恒雄	男	0749-55-0938	米原市
岸田　孝一	男	0740-37-0207	高島市
土田　幸夫	男	0749-37-2428	愛荘町、甲良町、豊郷町、多賀町

奮って応募してください

靖國参拝の短歌・俳句募集

(趣旨)
今年も3月13日から15日、県内各地から500人余が二班に分かれて靖國神社に昇殿参拝します。参拝者に、その思いを書き綴っていただくため、靖國参拝の短歌・俳句を募集します。

(課題)「靖國の旅」に限定

(応募用紙)
参拝往路新幹線の車中で配布する参加者名簿冊子に挟んで、参拝者全員に渡します。
応募者は、応募用紙を切り取り使用してください。

(応募数)　短歌2作品、俳句2作品まで

(応募作品送付先)
滋賀県遺族会事務局気付け・広報委員会宛
郵送またはFAX送信

(締め切り日)　平成28年3月末日

(発表)
機関誌「遺族の友」第251号（平成28年6月）、第252号（平成28年10月）発行に掲載します。

(選者)
短歌選者：礒崎 啓氏（米原市）
歌誌「青垣」選者　しがよみうり文芸短歌選者
俳句選者：寺村 しげる氏（彦根市）
元彦根俳遊館館長　俳遊館入門講座講師

総務企画部会広報委員会

さざなみ

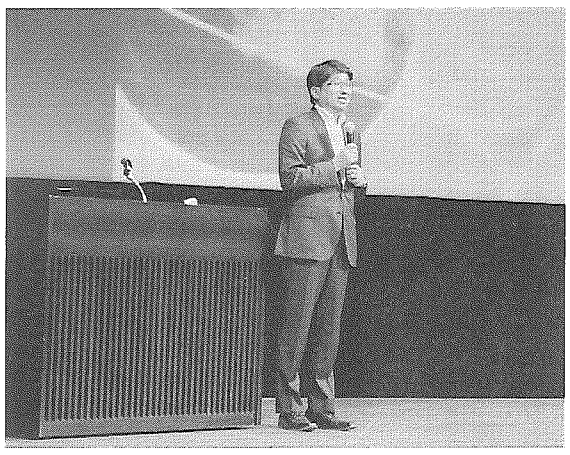
「戦後70周年事業」長崎市長が語る

日野町遺族会　会長　瀬川　勲

戦後70周年にあたる平成27年、日野町では二度と悲惨な戦争を起こしてはならないし、70年間平和な今があるのは多くの尊い犠牲があったことを次の世代にしっかりと語り継ぐ責務があるため、「戦後70周年事業」を各種団体が取り組み、日野町遺族会も構成団体の一員として催しを進めてきました。

その取り組み内容は「戦争体験を語り伝える集い」では、戦争を体験された方から戦時中の様子、内地の出征兵士の見送りや、戦死されたご遺骨の出迎え、学校の授業より教練、運動場での芋掘り、農家の手伝いなどの様子を聞きました。また参加者の中からも「広島の被爆二世」の方のお話も聞く事が出来ました。

「戦争の記憶展」では、戦中・戦後の写真、資料、物品等多くの方々に出品をしていただき、訪れた多くの方から貴重な資料、物品を観る機会ができ、戦争当時のことがよく分かったと聞きました。


講演する田上富久長崎市長

8月24日には、古賀誠日本遺族会名誉顧問の「戦後70年平和を考える」と題しての講演（「遺族の友」第249号に掲載）。10月18日には田上富久長崎市長より講演をしていただきました。

当日は二部構成で、第一部では約30年前に日野町内200人余りの方の戦争体験記が発刊されており、その手記の題名が「終戦の日、その日私は」であり、その中から三篇「戦艦大和轟沈」「追憶」「終戦の日の思うこと」の手記をピアノの生演奏をバックに朗読をしていただきました。

第二部は、長崎市長の講演。「Peace・from・日野町」と題して、次のようなお話しをしていただきました。

『8月9日に原爆が投下され、7万4千人の命が失われ、10年経って白血病、20年経って甲状腺がんが表われるという、いつ原爆のため病気になるのか分からない状態で一生過ごさなければならない状況等、原爆の恐ろしさと、核廃絶に向けての取り組みの大切さ、被爆国日本はアメリカの核の傘の下に入っていると言われており、リーダーシップをとるためには核を持っていない国々と一緒に「非核の傘」の下に入るという取り組みに切り替えることが必要ではないかと考えている。

被爆者の思いは、二度と世界の誰にも自分たちと同じ経験をさせないという思い。「ノーモア、長崎」二度と繰り返さない、という言葉から「ピース・フロム・長崎」長崎から平和をつくっていく、発信していく。この言葉はどこの町でも、国でも使えることで、「Peace・from・日野町」として日野から平和をつくっていこう。日野がまず平和な町をつくろうというメッセージを持つこと。それを伝えていく、繋がっていくことが大切である』と訴えておられました。

その他70周年の関連事業として、日野商人館において「近江鉄道改札口から見る日野町と15年戦争」の展示。「反核平和の集い」中井均滋賀県立大学教授の講演会。「小学生写生会ふるさとの夏を描こう」小林豊（日本画家・絵本作家）「絵本（せかいいち、うつくしい、ぼくの村）」の講演等の各事業に取り組みました。

これらの催しを通じて戦争の悲惨さ、二度と戦争を起こしてはならない事を皆様に伝えることが出来たのではないかと思っており、今後は記念誌の発刊をすることとしています。

児童生徒が語る　平和祈念式典

彦根市遺族会　安佛　久夫

平成27年11月22日、ひこね市文化プラザエコーホールに於いて、彦根市平和祈念式典実行委員会主催による彦根市平和祈念式典が開催されました。

参加者総数200人。岸田孝一滋賀県遺族会長のご臨席をはじめ、上野賢一郎衆議院議員、圓城治男彦根市社会福祉協議会長ほか関係各位の参列をいただきました。

参列者全員による黙祷を捧げた後、主催者を代表し大久保貴彦根市長が式辞を述べ、続いて山本起美郎彦根市遺族会長が追悼の辞を述べました。山本会長はその中で、「今日の平和は、英霊の犠牲の賜物であることを片時も忘れてはならないこと、そして、命の大切さ、人と人とのつながり、地域の絆をしっかり見つめ直すこと」と、式典にかける願いを語りかけました。

「追悼の言葉」の中では、岸田会長から「二度と再び悲しい戦争を繰り返してはならない」と、不戦の誓いを熱く語られました。

参列者全員の献花に続いて、滋賀県遺族会の事業の一つである、次世代戦跡訪問研修（鹿児島県、沖縄県）に参加した児童生徒の体験発表があり、発表した13人どの児童生徒も「戦争を知らない自分であったが、悲惨極まりない戦争は絶対あってはならないこと、戦争は全ての人に悲しみしか残さないこと、平和の尊さを伝え続けることの大切さ」を、実感を伴って語り、このような体験をさせていただいたことへの感謝を述べていました。

遺族会としては、ひ孫の世代にあたる児童生徒の体験発表に、参列者一同胸を熱くした次第です。

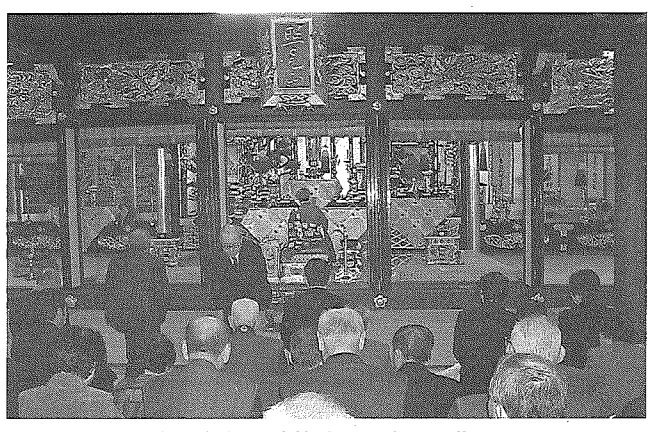
これからの遺族会を考える時、大変意義深い式典となりました。

追悼の辞を述べる大久保貴彦根市長

明るさ見えた忠魂碑管理

高島市遺族会　理事　川合　良雄

11月8日、高島市遺族会恒例の行事である「追悼法要と会員の集い」が開催された。高島市遺族会では毎年、市内6地域での持ち回りで開催しているが、平成27年度は「日本さくら名所100選」にも選ばれているマキノ町海津大崎の近くにある、真宗大谷派福善寺での開催となった。


毎年恒例の追悼法要と会員の集い

開式前には、市内各地から100余人が参集。来賓の方々にも参列いただき、本堂は満席となった。

藤原一麿住職の読経の中、参列者全員が焼香し、各々が英霊の安らかならんことを祈った。藤原住職は表百で「・・・武器を取り、聖戦の名のもとに戦場に赴かねばならなかった仏教徒たちの悲痛な心を決して忘れてはなりません。しかし、私どもの多くはそういう犠牲者たちのことを忘れ果てて、今は繁栄に酔いしれております。誠に恥ずかしいことではありませんか。今日の平和が、先の戦争によって喪われた幾千万の命の犠牲の上にあることを常に思い起こして、力の限り真の平和の実現に努めなければなりません」と話された。

戦後70年が経過し、薄れゆく記憶をどう継承して行くか、私たち遺族の課題である。現在、2回目の戦没者の孫・ひ孫の青年部入会意向調査を実施しているが、対象者にはぜひ入会して欲しいものである。

午後からは、会場を今津町のサンブリッジホテルに移し、「会員の集い」を開催。井上秀次高島市遺族会長の挨拶の後、来賓の方々からお言葉をいただいた。

福井正明高島市長代理の清水豊彦健康福祉部長は「市内各地に建立されている忠魂碑の維持管理について、皆様方に本当にお世話になっていますが、現状がこれで良いとは思っておりません。市長もこのことはしっかりと認識しており、問題意識を持っています。一朝一夕には前に進まないが、なおざりにしているわけではないのでご理解いただきたい」と挨拶。遺族会員も平均年齢が75歳を超え、忠魂碑の維持管理に一抹の不安があったが、英霊も一安心されていることだろう。

＊

「追悼法要と会員の集い」に来賓参列の皆さん（挨拶順・敬称略）

高島市長代理　健康福祉部長　清水豊彦
高島市議会議長代理　副議長　秋永安次
衆議院議員 大岡敏孝 代理　秘書　岸田郁子
滋賀県議会議員　清水鉄次
滋賀県議会議員　海東英和
滋賀県遺族会長　岸田孝一

行政主催の追悼式開催

大津市遺族連合会　会長　服部　清和

10月21日、終戦70周年記念の大津市戦没者追悼式（会場：大津市生涯学習センター）が大津市主催で開催された。越直美大津市長をはじめ津田新三大津市議会議長、市議会議員38人、市内の遺族会員134人が出席した。越市長は「世界平和と恒久平和実現に向け、ふるさと都市恒久平和都市宣言の理念に基づき、より一層の努力を傾注するとともに、次世代の子どもの笑顔が輝くように邁進することを御霊に誓う」と式辞を述べた。戦没者の妻を代表し田中セイさん（97歳）の献花につづいて、出席者全員が菊花を手にして英霊の冥福を祈った。

初の行政主催「平和祈念戦没者追悼式」は成功

草津市遺族会連合会　会長　木村　正昭

草津市では、昨年度まで学区単位で開催されていた「戦没者追悼式」が今年度から市域での追悼式の開催となりました。11月28日、私にとっては大変長い一日でした。第一回目となる『草津平和祈念戦没者追悼式並びに平和祈念のつどい』が草津市と実行委員会主催で開催されました。私は実行委員長として、準備の段階から初めてづくしのことばかりで本当に大変でした。

午前中に『草津市戦没者追悼式』、午後は『平和祈念のつどい』の2部制。追悼式には岸田孝一滋賀県遺族会長をはじめ、武村展英衆議院議員他多数の来賓を迎え、草津市戦没者の遺族多数と、一般の方々の総勢約300余人が参加。各学区の支部長さんが代表で献花。これに合わせて学区遺族の方々が同時に拝礼。初めての追悼式でしたが盛大に開催されました。

午後の『平和のつどい』では、特攻の生き残り、93歳の北島令司さんと鹿児島知覧の特攻の母、鳥濱トメさんの孫明久さんを迎えて、戦争の恐ろしさ、命の尊さを聞き、参加者の涙を誘いました。

その後、『次世代へのバトン』と題して、滋賀県遺族会主催の次世代戦跡訪問研修に参加された中学生3人によるトークショーがあり、『平和祈念のつどい』の目的が達成され、参加された皆様がたも満足されたつどいとなりました。つどい終了後、平和のシンボル鳩のバルーン200羽を参加者全員で放鳥？無事終了。

実行委員長としての大役も無事果たせた一日でした。

鳩のバルーン200羽を飛ばす つどいに参加の皆さん

最後に、曾祖父を戦争で亡くした南郷中学校3年生濱嶋沙希さんが、滋賀県遺族会次世代戦跡訪問研修（沖縄方面）に参加した体験を発表し、「戦争を知らない私たちが、戦争について知り、考え、研修で学んだことを後輩に伝えなければならない」と力強く決意を語った。

「命（ぬち）どう宝（ほう）」（命こそ何物にも代えられない宝）

大津市立南郷中学校3年　濱嶋沙希

私の曾祖父も戦争で亡くなりました。祖父から戦争について話を聞いたり、授業で習っていましたが、正直恐ろしくて知るのが怖いと思いました。

「人間が人間でなくなる」人間らしさを失うということ、戦争はすべてを奪ってしまう。

沖縄に初めて行き、初めて知ることがたくさんありました。「ひめゆりの塔」に行って、津波古ヒサさんにお話しをしていただきました。その内容は、あり得ないようなことばかりでした。信じられない、信じたくない現実がありました。今どれだけ幸せかということを改めて実感しました。

2日目には、「近江の塔」前で慰霊祭がありました。みんなで黙とうをし、菊の花を献花して、故郷の歌を歌いました。「平和の礎」には24万人の沖縄で亡くなられた方すべての人の名前が刻まれていました。その中に、引率の方々の父や母がいたといわれました、父にはほとんど会ったことがない、話したことがない、今ではあり得ないようなことでした。そんな悲しい話を私たちにしてくださったのを聞いて私は胸が熱くなりました。

糸数アブチラガマは当時、住民の避難場所になったり、病院として使われていました。ガイドさんと一緒に中に入りましたが、話をしているガイドさんの必死さが見られました。「そんなに辛かったんだ」、私にもその思いが伝わってきました。

「戦争は二度と繰り返さないでください」私が今回研修に参加した沖縄で、お話しを伺った方々から聞いた言葉です。

いろいろな体験をさせていただいて考えが変わりました。悲しいことに、地球上から戦争は消えていません。戦争が無くなるにはどうすればよいか・私たちに何ができるのか。今の生活に感謝し、家族を愛し、世界の人々を愛することのできる平和な世界になるように、私たち戦争を知らない世代が戦争について知り、考え続けること。

私も今回学んだことを忘れず、次の世代を受け継ぐ人たちに伝えなければなりません。

「命どう宝」この思いを胸に、日々大切に過ごしたいと思います。ありがとうございました。

古賀誠日本遺族会名誉顧問の講演に感動

長浜市遺族会　会長　西川　満

11月7日、長浜市平和祈念式典が長浜市浅井文化ホールで開催されました。

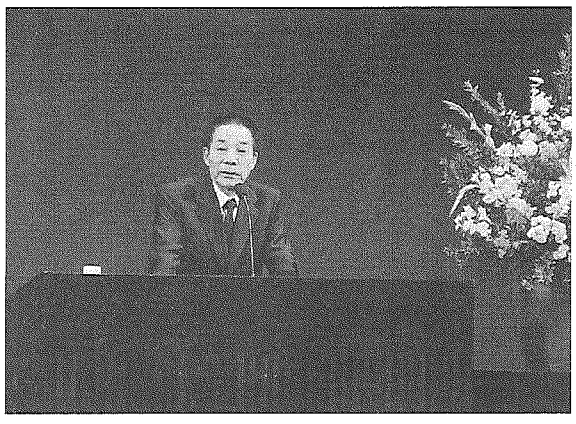
平成23年より長浜市実行委員会（市・市社協・市遺族会）で主催され、5回目となります。今年は長浜市連合自治会も主催団体として協力いただきました。

黙祷、式辞（藤井勇治長浜市長）、追悼の辞（西川満長浜市遺族会長、浅見勝也長浜市議会議長）の後、参列者全員で献花。中学生代表による平和都市宣言文の朗読、平和への讃歌合唱（長浜市立長浜小学校合唱団）へと続き、中学生3人の次世代戦跡訪問研修参加感想文の発表には、会場から大きな拍手で応えられました。

この後、古賀誠日本遺族会名誉顧問の「戦後70年を迎えて」の記念講演をいただきました。先生は、戦争でお父さんがフィリピンで戦死され、お母さんの手で厳しい時代を育てられた経験を話されました。正に私たち遺児の歩んだ道と同じであり戦争の悲惨さと、平和の尊さを訴えられる姿に500人を超えた満場の参加者の中には、目を押さえ涙をこらえる光景も見られ、感動のひと時でありました。日本の将来に不安を感じる最近の国の動きに、今まで以上に平和を守ることに敏感に対処すべく決意を致した次第です。

講演は遺族会関係者はもとより、一般市民、市内の中学生諸君も50人余り熱心に聴いていただき、また、会場入り口のロビーでの戦争中のパネル展も多くの来場者に関心を持って鑑賞いただけたと感じております。

最後に、県内の遺族関係者はじめ一般市民、中学生などの若い方々等多くの皆様に参加をいただいたことに主催者の一人として厚くお礼申しあげます。



講演する古賀誠日本遺族会名誉顧問

戦没者等の妻に対する特別給付金について（第27回特別給付金（い号））

もう手続きはお済みですか？

○請求期間

第27回特別給付金（い号）の請求期間は**平成28年6月13日**までですが、請求はお済みですか？

☞ **請求期間を過ぎると、第27回特別給付金（い号）を受けることができなくなりますので、十分ご注意ください。**

○対象者

「第22回特別給付金 い号」の国債を受給していた方で、平成25年4月1日において公務扶助料や遺族年金等の受給権を有している戦没者等の妻の方です。

☞ **平成25年4月1日にご存命であれば、それ以降に死亡された場合でも相続人からの請求が可能です。**

○請求窓口

お住まいの市町の援護担当課です。

☞ **詳しくは、市町の援護担当課または滋賀県健康医療福祉部健康福祉政策課（TEL：077－528－3514）までお早めにお問い合わせ下さい。**

平和の祭典を開く

多賀町遺族会　会長　山本　孟増

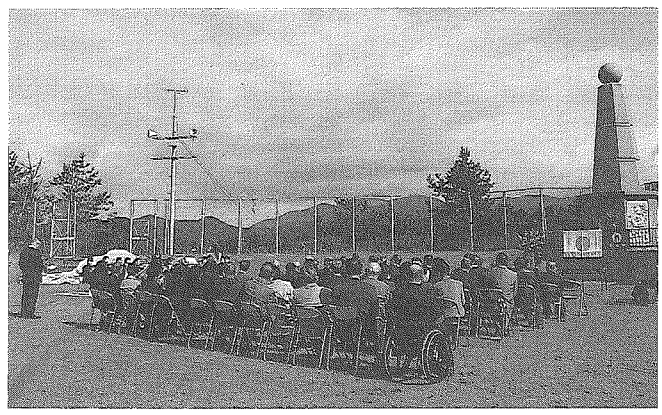
11月3日（文化の日）、多賀町「平和の祭典」が、町民グランドの東角に立つ「平和の塔」（平成13年春建立）前にて挙行されました。

開催主旨は、「終戦70年の歳月が過ぎ去り、今日では平和と繁栄を等しく享受する社会になりましたが、一方で戦争のもたらした悲惨な歴史や激動の戦後の足跡は徐々に風化しつつあり、今一度、戦争の歴史を再確認する中で、かけがえのない命の尊さと恒久平和を後世に伝えていかなければなりません。

この平和の祭典は、戦争その他の事態で平和の礎になられた諸英霊に対し、深く感謝の誠を捧げるとともに、将来に向けて人々が英知を結集して社会の環境浄化に努め、戦争のない平安な時代が行く末永く続くことを祈念して開催します」となっています。

多賀町社会福祉協議会が主催し、役場からは町長、副町長、町議会議長、町議会議員の皆さんが参列し、各字区長、社会福祉協議会役員、評議員、民生委員児童委員など各種団体の役員、町民有志の多数が参列しました。祭典は、開会のことば、国歌斉唱、黙祷、式辞、来賓のあいさつにつづき、参列者全員の献花に移り、多賀中学校吹奏楽部の演奏を経て、閉会のことばで終了しました。

解散後、遺族会有志にて忠魂碑に参詣いたしました。多賀町社会福祉協議会はじめ関係者各位に、遺族会一同感謝申し上げます。



「平和の塔」の前で挙行された「平和の祭典」

おかあさんを訪ねて

戦没者に哀悼とお礼を

野村いちのさん（東近江市）

平成27年8月15日滋賀県護國神社の拝殿には、全国戦没者追悼式場から流れる正午の時報を合図に続く天皇陛下のお言葉を、車椅子に乗り、手を合わせてひたすら黙祷をささげ聞き入るお母さんの姿がありました。東近江市南花沢町の野村いちのさん（満102歳）は、戦後70年の終戦記念日にあたり、孫、ひ孫とともに滋賀県護國神社で黙祷を捧げ、戦争で犠牲になられた方々に哀悼とお礼の意を込め参拝されました。

いちのさんの夫「直二郎さん」は、大阪市西区で親戚の営む店で働いていましたが、二度目の出征となり戦地中国へ。いちのさんは、昭和20年3月大阪大空襲を心配して迎えに来られた義兄と一緒に、西区千代崎橋辺りのたくさんの大空襲犠牲者を目にしながら、ようやく夫の実家の滋賀県に疎開されました。いちのさんの一人娘は未だ幼く、夫が早く帰ってくるようにと祈っている間もなく終戦、玉音放送は八日市駅で聞かれました。

「拝啓、突然ではありますが直二郎殿には、昭和21年4月24日第一病院において戦病死せられました。御一家皆々様の御愁傷を御察し申し上げ衷心より御悔やみ申し上げます。（中略）、公報も間もなく御手許に達すると思います。（中略）、昭和22年4月26日　鮮満残務整理部長」

夫が中国の延吉第2収容所第一病院で亡くなり、3カ所ある合祀碑の左側合祀碑に埋葬されたという位置図の書かれた手紙が届いたそうです。手紙が届いた直後からは、夫と同部隊だった人を訪ね、手紙の内容の確認をする日々が続きました。田舎暮らしの経験もなく、田畑の仕事も全く知らない生活でしたが、近所の方々から種々と教えていただき、お陰様で80歳まで元気に仕事を続けられたそうです。満100歳を越えた現在は、先に逝かれた一人娘に代わり、孫、ひ孫に囲まれながら毎日デイサービスに通う日々だそうです。

「命からがら、この地に来て、夢と希望だけを胸に秘めて生きてきたわて（私）は、幸せです。」と語りながら、「二度と戦争を繰り返さない世の中でありますように！」と願う、孫、ひ孫の皆さんと一緒に護國神社の境内を後にされました。

（東近江市湖東支部
女性委員　村田　有利子
広報　安部　フク子）

戦後70年に想う

竜王町遺族会　貴多成道

私の生い立ちですが、昭和16年に旧満州の奉天で生まれました。

3歳の時に父は戦場に出征しました。父親に抱かれたことは覚えていません。記憶の中の父は、古い写真の姿でしかありません。その父も、昭和20年1月10日に激戦地、フィリピンレイテ島で戦死しました。

昭和60年、「滋賀県遺族会の海外戦跡慰霊巡拝があるので、ぜひ参加して拝んできて」と母に言われて参加しました。レイテ島に行くまでは、亡くなった父に強い思いを抱いていたわけではありませんでした。

日本から約3千kmも離れたレイテ島ドラグ、西方山中2km、一歩足を踏み入れると、父への想いが次から次へと沸き上がって、涙が溢れ出し、止めることができませんでした。

「日本からこんなに遠く離れた地で亡くなったのか」と思うと、胸が詰まり、お経を読むこともできず、「おとうさん」と叫びたくても声も出ませんでした。

戦後70年といっても区切りがつくと言うことではありません。赤紙一枚で親や妻や子供たちと別れ、戦場に出征された英霊の気持ちを思うと、心が痛みます。

これからも、滋賀県遺族会の戦跡慰霊巡拝が続く限り参加し、英霊のご冥福を祈り、お詣りをさせていただこうと思っています。

滋賀県遺族大会に参加して

湖南市遺族会　中野富雄

戦後70年の節目の年とあって、滋賀県遺族大会も盛大に行われました。

平和な国であるよう願いつつ、水落敏栄日本遺族会長の「遺族会の今後」というテーマの講演を聞き、特別弔慰金に尽力をいただき、今後尚一層の努力、協力をと聞き入り痛感いたしました。

長年遺族会に貢献された皆々様、賞状を受領され、今後も一層の協力を願い、労を謝する言葉がありました。今後遺族会も世代交代の期に来ています。確かに、行事のあるたびに私たち兄弟姉妹の参加は少なく、行事に支障が出てきています。次世代を担う孫・ひ孫に入会を願い、協力をと願っておりますが、昭和後期、平成生まれの孫・ひ孫に先の大戦の話をしても、実話と関心を持って聞いてはもらえません。戦争を知らない子どもたち、戦争の恐ろしさ、残酷で悲しいことです。

次世代までも続く後悔、この思いを次世代の子どもたちに伝えるべきと感じました。その後、近江高校吹奏楽部の演奏を聞き入り、華麗で凛とした音色に癒され感激満腹の一日でした。

私の人生の歩み

栗東市　社納　源太郎

私は昭和10年2月、農家の長男として生まれました。物心がついた頃、昭和20年8月15日に大東亜戦争が終戦となり、その日から1ヵ月後の9月14日に、父（源之進）の戦死の公報が届きました。

その日から我が家は戦いが始まったのです。9歳を頭に6人の子供と、母と祖父母の家族でした。下の2人の姉妹はお父さんの顔も知らずに、手をひかれて泣いている。1人は背中に負われて泣いていると言った毎日でした。母を助けるために12歳から野良仕事に。春は牛を使っての田起こし、秋は足踏みを使っての米の収穫と、子どもながらに大変でした。

中学校を卒業後直ちに、母の家計を助けるために親戚の人の勧めもあって職業に就き、造園の見習いとして修業して、一人前の職人となりました。昭和47年5月に、某会社に就職。先輩に慕われ、お客さまに信頼される日々でした。

その頃から遺族会活動が始まったのです。金勝支部（現栗東市）支部長として会員の集約や組織作りに、また、栗東市遺族会長として2期、4年間の前後に滋賀県遺族会社会福祉委員会の委員として、平和行進やスポーツの集い等々に参画して参りました。滋賀県遺族会の一大事業でもある靖國神社参拝旅行には毎年参加し、兄弟姉妹夫婦揃っての参加もしばしば。今回の次世代の子どもや孫の会の立ち上げに子どもをいち早く入会させて、将来を期待したいと思っています。

地域にあっては、神社やお寺の世話役や総代を現在もご奉仕しております。過日、滋賀県知事より栄えある表彰をいただきましたが、これも偏に皆様のご支援ご協力のお陰と喜んで居ります。

むすびに、理解ある伴侶に恵まれ、傘寿になった今も元気でありがたく思っております。